

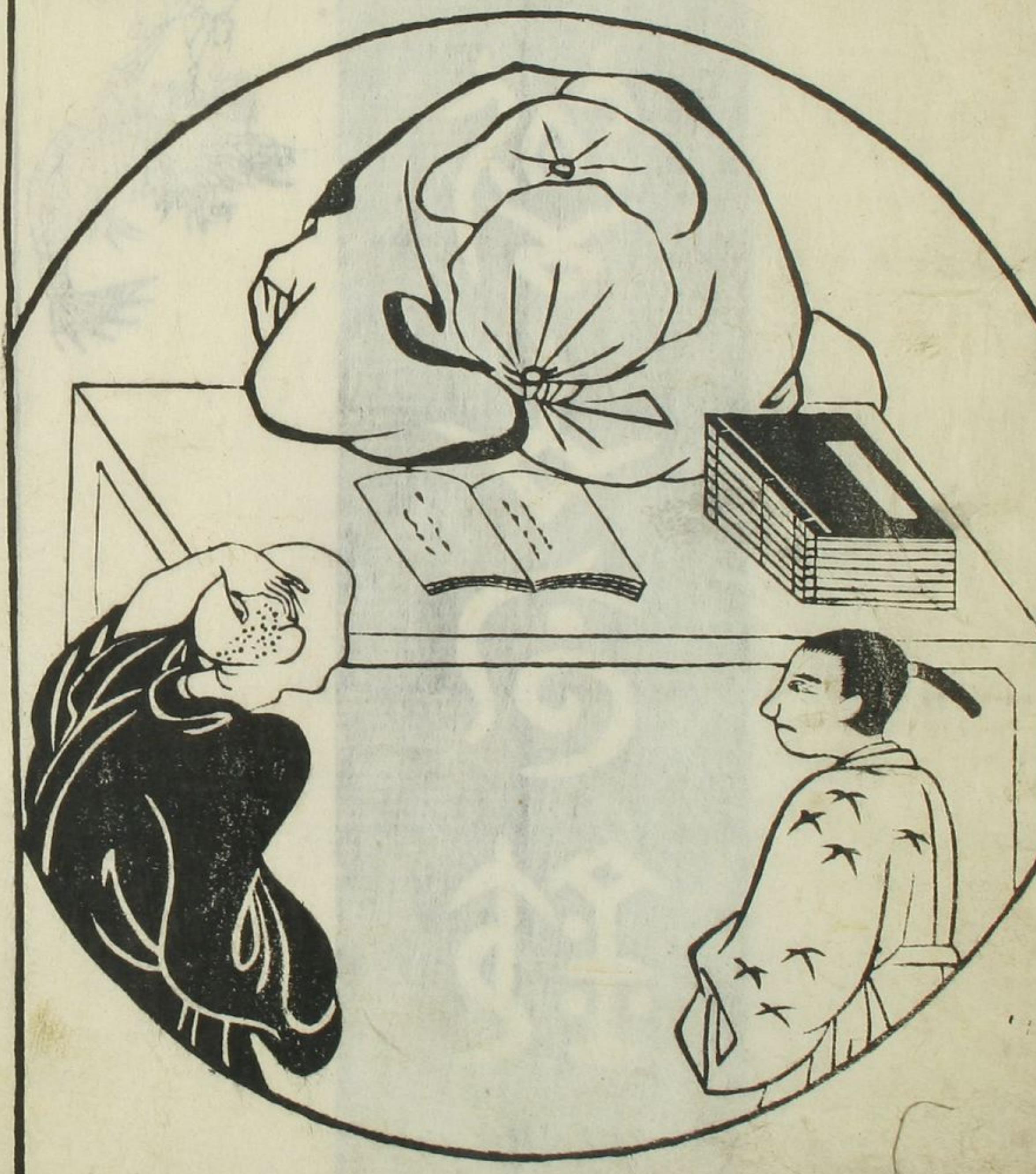


5

古今圖書

卷下

古今圖書
卷下



古今圖書
卷下

連二房

金匱圖書
卷下

物序

今より古貨をとおさんすへ、漢の司馬遷の史記
に、滑稽旨せうまと號されしの六種に名とあつて、
而て訛諺の一通と號へ、一章題の尊名も、之と
稱へ。滑稽旨は、能諺の事と云ふ。半疑一疑
の計とある。より傳仰を矣のじまこと、實れで訛諺
と名の稱は、ともあそびきと號する。しゆ
ほくと、シヤウヌセの自らと、タヒヅレを詠歌

2

古今圖書
卷下

卷下

連歌の事かと考へて連歌が「虚言せ體」に
あると申じてせなぐ集に「うちのモモだの實詠
もうち詠證の事」といふと考へて和歌の家と連歌
の門と人偏と言偏を字論めたと被るの處
訓より例へ我の事の性と云ふ代句對一
穿鑿をとつてとてせば「詠證」能詩とと
対すおとてやくのをとひあつてはとがれど
これとて「詠」の用と「對」にはけりの事と
あくゞみの湯とてよつてやげむとせば
詠證の眞言事とえひ發てたる御の東をすと

あくゞみ中向の十首條へとて詠證の連言
をもじき詠古の罪とつまらざる者等の事
やうに詠證と詠證の事とひきよつてと今
の用事とあり得て詠證の如き事へひれ春秋
の事はとく一すとて今其傳記とゆくとて作
せた首條へた傳の格とひくとてあつてと
ひてててやすとてたれ木、雲あれら也て直
一部の次中を例へ上中下の三卷うると日月星
のことをひてさう詠證の十九傳と云ふ

己うちの作の附録と二冊とての巻を一部
又再あるやうに題す。走るふとが手連詰と
行ひ。かよわせと左毛詰を連立にゆりて
遠く。古代の滑稽者とたゞ近く。今日本の俳諧と
ひもむり。能詠。今おどと各所くるら一
かとく一部の土地をすと被る。能詠。古くは
さう千余一斬の科詞あれ。先所。古とすと
ちとほあじとつと一刀兩断の法詠もあり。まことに
連歌の兩式。すら高年とつひすと言ふ。あつとほ
和えせずとすねあつ。訣言連詰の五よみあれ。

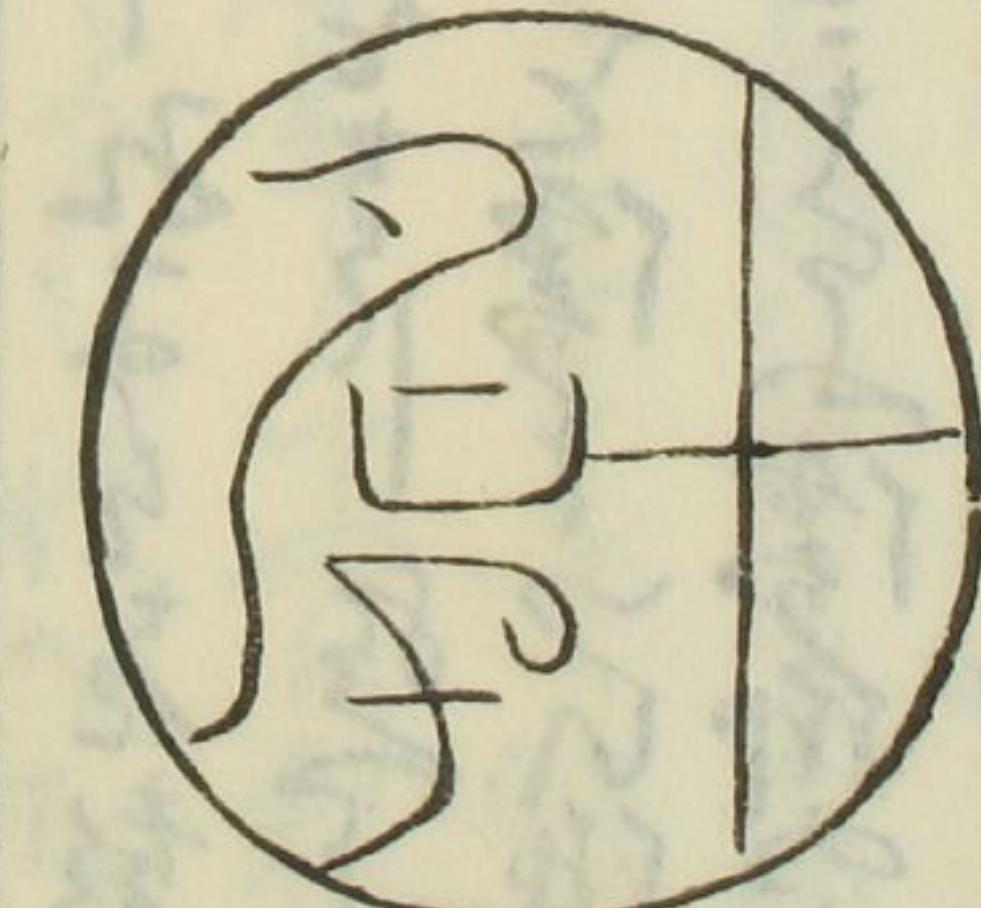
云々敵上の活興とて。かと吉良工房の源氏と
へえとくわみとぞ。豊詞。あくへて。驚詰。事詰
とあくふじとく。能詠の用とれどとを観
のきくひあらんやあらへ連詠といひ。あらと
は。ア詰めとりとく。あらとくに満たの能詠
とく。よーとくとく。其のた本あらんと
詳論。それ中たの能詠。皆く連立の用
とすと。能詠とよ詰とあらと。それ。能詠
やく。能詠とく。とく。とく。とく。とく。

きしひあらんや拂まく拂まくになまくすへ
またそれ泥濘のむとすらももとらぬも詞と
じかげて運音を附ふがてねりてはるはるの
名とそよアリてはるはるのなとひととを近と
あへ眼すとやうトテ一すまに詠歌をとらむじ
まくまくまくはすのなとせうトケルてはす
名とひとを角アリとまよもとけのもの
とく胡越の風とくふとくやまくとくとくと
た本うちやソシモ一通の達手とすれねると
燃灯のふとほくとほくとほくとほくとほく

をくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
ときとときとときとときとときとときと
ときとときとときとときとときとときと
ときとときとときとときとときとときと
一ノ祝とあらわやまよ傳仰の大通じ
とくとくと祖の性とたぐはとくの音にひら
て百疊とく毛織とあきれて祝音と先帝也
然接とゆづとと作と詠人の感作と書いて
まことにすと年とよーとさればよすとすと
ハ全く柳子竹の太往と一すと蓮ニすと
ハきくあると西式を本とし一節の後だ

一古の私といれまんとあつての國のいづ
せひつ岩戸の壁を而ひよ神と詠うるを
おひあくその林せどもよもじい砂の馬せ
はくとて俳諧のこよみふくわざん

享保己酉二月吉祥日



古今切凡例

- 一古抄ニ○下接トハ祖翁ノ用捨ナリ且下ニ新古ノ
達用ラ考ヘシ△再接スル先師ノ監察ニシテ△校
トハ蓮ニカ拾遺ナリニシテハ今ノ相故ニ知ヘシ
- 一古抄ニ實評ト要議ト明監トニ段ノ差別アルハ
支配ノ輕重也ハ三座トムイ一世ト云イ而せト云ナリ
總テハ新古ノ次論ニ百慮一失ノ辭宜ト知ヘシ
- 一古抄ノ省法ノ下ニ東ハ家語ノ詞ヲ假テ實見猛ノニ事
云ハシ制度ニ時代ノ變ラムイ或ハ用ルハ其人ノ自在

ニテ用サレハ其人ノ不自在トハ今ニテヲ孔明セスアリ
古風ノ偏屈ヲ崩ントナリ或ハ先師ノ再撰ノ下ニ麗
如是トドム經ノ如是其間ミテ滅後ニ再撰ノ誓言語ナリ
一此抄ニ證句ラ采キニ一系ラ定テ名無サキハ總テ祖翁
ノ證句ナリ系ラ定メスヘ此印ヲ書テ直ニ送書ナル
多々先師ノ證句ナリ但シ別人ハ句下ニ其名アリ
一此抄ニ黒園ノ印ハ總テ文法ト句格ナリ卷ニ文字
ノ傍ニ隔テ自園ノ印アルハ或ハ切字ナシ節目ト知ヘテ
或、對詔ノ相致ト知ヘテ或ハ改ノ要文ト知ヘ
一此抄ニ古エトハ多々連章ノ兩式ヲ指レ古抄トハ貞徳ノ

佛金ヨリ埋木噦竹ノ類ナド一部ニ埋木ノ名ヲ指
サル師資ノ辭讓ラ察第スキナリ或ハ稀ニ本ヰト
云ハ今ノ貞子寺ノ本エラ指テナリ

一此抄ニ異名異姓トハ或ハ牡丹ラ御見草トハ異名
ナリ牡丹詳トハ異姓ナリ或ハ音訓ノ差別トハ自雲
ラレララモトエラ名ハ異ニシテ姓ハ同じ也故ニ異名
ト云イ異姓ニト云ヘル今ホト古抄ノ遠因千箇條
ノ古法ノ下ニ悉知スレ

再撰貞享式序

並目録

東方坊

久言すむじへけ半月を中古の記載と今世他俗
とまことゆう波瀬の事もひあるから白馬の山十二法
ととくりて始とて又傳よひちあはれとほど九條
とあるもさす九條と今半月せらるて久享
の代辰巳うえ祿の奉公よりうきよの間せ撰あれ
他俗の時代と見てはふる貞享式と題す
ハ後後と行人の称名ちりやせんとして一部の禮
もろ下とも此を人の儀奉と山川らえもすせ舜

の顕本ととくりて証言連語の所古とぞと他俗
とまこと次第の端のとて士農工商の人とらそひ
ト字と達の全とさうに保中と貞新とあうりに
そやはう十九條の裁断と証言の字論ひとす
て翁句よかそのるをうり取の約字はやえと某
直はりに元八月をあらうひおとすとま難と同名
異用の誤あるいと角すと古にの名同うりあて
がくすの當用としとととと種門の達流うりて
はともかくとそくとくとされよ。も書の件稿
がく早津屋の密撰うりて或と相致の書入

ありあきちて消されしりありゆつても時まく
すむして口ぬふほひかねられひつゝに再譲
の場所をもておそれておれむとぞ思
お角のあやめりほんとあくと竹林のまく
あんまと兎園の廻はとほくとおみのとせせ
達さんとおまの偏圓あじゆとよと武落
の左内へ講へけきとせくとたとせよ
不とけ書とりて一巻一段の文とひととて記説の
右側を以てあれと他説の今式へかくのとひととそ
石にはまよとまよひて書かむや和とさう

近くとけ撰のが現とまくとて他説を以てはま
論ふとよとせば、互備の文とやうけ訛諺
詠笑の用ちらととありと一かよとくかせ
えとまよとまよひて放翁の授けとてろと建行
のとだとるやとせ詳考

寶永七年十一月廿二日

皇朝式同錄

大段ハ本オノ同錄ナリ
小段ハ再撰ノ附錄ナリ

- 一俳諧と諧諧ニ字論セ事
- 一俳諧と諺諫の通ある事
- 一六義ト今ノ和訓セ事
- 一多發句ト加字セ事にあり事
- 一附 心ゆゆす 中ゆゆす
- 一 指教ゆゆす
- 一一切ト之の差ふある事

附 二字ゆゆす 二字ゆゆす

三段ゆゆす 二段ゆゆす

一心ゆく多名ある事

附 とゆうのす トゆうのす

大廻のす 去がゆのす

一押字と抱字セ事

附 句讀ゆゆす

無名ゆゆす

一一口ひのうふせ事

附 律哉ゆゆす

一 いのひのや。のすすめ事

附 うせすのす
らんせすのす
一 もすのす

歌詩のす

一 石韻と表ハ句せ事

附 発句とゆのす
歌と歌子のす
オシキ余波のす
四句の短歌

一 四折と曲の節、せめ事

附 起てと句作のす
撰集あらわゆのす

一 月花せ事

一 指合とまく様せ事

一 壱ふ句せ事

一 季の節の跡づる物せ事

附 二季三季四季よりする物のす

えの二季へと去まやのす

一 各取と雜の發句せ事

附 新駄のす
四季格のす

詠詠うのす

一四季の名類也事

一伽誥ノ假ノ遣也事

總合十九條

古今お席同終

禹櫻貞吉辛
日之一

古今伽誥序

芭蕉庵

古事記の伽誥ニシテ歲のじつゝ名ありト
周奉年めにそり訛諫トモアレ後魏の角ト訛矣と
いふじれく史記トモれ行の書寫トモルヘテ
和漢ノ風雅の二事トモトあれりきりもくに中し
の説得トモトモ應安の新寺トモトモヒ慶長
の傳金トモトモトモトモ合トモトモトモ合
タタタタタタセの云寺トモトモトモトモ合

よしとすかくそれも中ちよに連れていた
連れていたとては、他派の信言とありて
今せ他派の染すとて一もすりぬをひくふ
まくらむだのちひくさんとちよとされと
仰家と教科の二はあうとくはくらあだま
そくりもとと大和の風雅と高麗の風とこれ
で言語をあぐの聲あんきらうと左のの
詞りせずよとけりはとあわとはとせり
よとせよほよの的語りではとく連れて
むくと效みとむむとくへとおおきりゆく

唐とすとし言ふあい遊々室とりや秋り。と
はともじーすよや重典の拉もろとるあ
をとこうかんすとかじいはと年月よやとくす
ときよとく和歌りしわせれ年のひくらはす
れの家訓は實政権政の左訓と称り實政
あひきくふとむとむとむりぬまつて他派のす
ちり張こすの少すばくーーーーーーーーーー
あひとあれハ種く西とこうとくや實くや
く善ととくじーこれにて手の實指とくを
て用やうとせ人の自在すと用ひうりとくの

不自在と云ひ一けむとせよとひもうにれ前の
ニニ子とちくび付ふ侍筆筆と嘆叫のとき
レシテまことにすとぞ今もと御やうり耳同の
エスあんとて取捨ヨ一子の私あく今ヤ一種モ
裏ほより近く一せの實議と窓ひ遠く百世
の内盤よはうせア天にの冥念とすれ一毛モ
そよそ一知の抜記トツハはすの私とくも
はすの名とゆとへうるる

貞享五年戊辰孟春如意日

再撰貞言手式

○能諧と詠諧と字論記事

ひうりうり能諧と詠諧とと和音の字と字論
あれと詠諧と史記の索隱と渭舊、猶能諧、^{ヨリ}能諧と
皆うり能文ありて、^{ヨリ}能文なくせ説林と詠諧の本店
へがれて引とると詠諧の中じう一述志の仰代北
右今集書とけりと詠諧のニニと引と歌の解
と詠諧とくら抜遺集とせばニニと用ひて漢よ
同名の他諧ちうりや傳と別名の詠諧ちうりを古文集

主副假名あされひもよもかさはせひろ
て訛語くとよもまれひつりう風雅のねま
ちれりらもあうハモハモおとへと解ふ内不ぞ
トヨ能語ニテハ訛語ニテ能語四ト音稽首云
法輔の奥儀おつしゆて宗祇のきりまつを訛ハ
甫尾ゆう訛ハ胡音ゆかとあれハ能語と訛語を
アスコト訛語の非比局あうとやむでまわすと重
づりやくと離のまと用いあうおどりゆよまう
てれととあがめとふあれハ能門と對へて穿鑿を
一ノ歌これとそとの訛語ひりて所資せむ

子とてせひや

東菴云△再撰もんじ訛もほくく人偏の
俳字よけアヘ一ホ走まのまじとやれと
矯セ慎格とよもれをの書也箇當とけり
て能門と充堅もとくもととと例へ我翁の
遜言もり也もうハシテ能論より運主とす謂
ひとも訛語の名もとゆ減して今の能語せ
畜用とえども訛語の名もとゆ減して今の能語せ
て多くも訛語の遊戯もととまよとこげくも
訛語の空戯もととまよとこげくも

と其用とどきに今子貞吉子某のむら
さくすよとむりて又かまひゆのふくた
はとくも

○ 他説と訓諺の通ある事

天也とてにいをて極天也ありせんありて遠
ユドリてりよりと人んとくとくとくとくとくと人間
の私ムスニシル物のまひありて書うるもと
西々とあわせと秋がる處とまくとまくとまくと
まくおひれすと空とまくとまくと秋在とまくと

左の左在楊墨のまくとまくとまくと
そくそくとせぬ底と高の家業ととくとく歌連他
の貞雅とあるよととくとくとくとくとくとくとく
中止他説の二とと漢史と滑稽旨の各へ何あ
周奉年めじうととくとくとくとくとくとくとく
ちはまくと今とくとくとくとくとくとくとくと
るあうてはあくとよすや○乍接とくに他説の
道の左在の高と底とかられどり傳伝の虚實
とやうけて訛諺ととくとくとくとくとくと
法とあくとせたとくとくとくとくとくとくとく

詭諫しげ笑し滑稽旨々贊詞のゆえもうとやう
もといふもとあれとせんと又倫の和と本アア
君文の善ととどよへる婦中の悪とやらだま
善と書く悪と悪とて直言とて直諫
まれハシメ付夫人の様様とヤムカされと云の
大ととまつやモれとしりやあ王といふ
ゑみとあはとくのれ、悪と善とありて人を
儒仰の一言一感下勅ちぎれて或と善をうる
日あやかと殿村のときあ王とされあむと
ゑとありて比千の脛とモレタリエ人の肝

とぞくらふたふじゆき人間の善悪とくわ
ハ千方偏照のきぬとくあら六精震動等特
とあつてアソシ人トヤマケテキ魯ヒリカ
シム、楚の子西と魯王の使とてそとて北
諸侯より楚王の心とおもひやうぢやうを
子とすて儒門のますし諱官の五義才中と詭諫
とすて最上とあがめ子西とくわがはなにわ
傳家と仰りと捉能すとくは益路とうづと
うみとくもりてもよ善人とあらじく智河れ
取せざれますもあらお祖とあれあく詭諫と

り歎れやくあれに直諫より人せんをつゝて古今
より人の口すまことあらきとまれへ他傍の
名とすと治國齊家の一助にて忠臣と云ふ
又論とやりましたる儒仰の大名とすともを知
「まことをとくレ諫諫ちり」一書にわづへん方題
「まことをとくレ諫諫ちり」一書にわづへん方題
「正諫」以明節「明節」不可以久安也故
詆諧以取空口以とせ替へ内諫のり難と云ふ
尤文と詆笑のが根と云ふとひく詳く他説とも有る
「まこと」以て今より能ばざことにありてゆる
「まこと」以て今より能ばざことにありてゆる
「まこと」以て今より能ばざことにありてゆる
「まこと」以て今より能ばざことにありてゆる

はやうたひ音相に仰のとまし一言の下に漏破
一歌人連音と揖謙とあつてまじめ建行の
意をまうる虚実のじかくにまじめばへまわれ
をせん和よあそくとまくねねくの會用もあ
原壤と夷北比言レ類圓と東北贊詞と一分ハ向
のきくひああもやをまく百々の事やかとほい
戸よせ岸とみとみとみとくちあア即川をか
まく年玉命と通の極不ア一戸越少方義
もとをあい日比自諫とちうくニシテ子えにせん
とほくへ他説も高下媒うるをまうく連歌

ゆゑをと詠説へかゝりて五七七句法を言詠の
ありひつて例の詠諫ともいふ通とあ。附せ
詠笑とも云ふにとあると一先づ然ひ達う
不^レトテキヨリ月占^シせくよ舞謡よりる有^スモ
東文^シ云け一派の要文^シと傳伝の本末迂遠^シ
語^シ亦ちの人^ハ高舉^シと詠^シと能詠^シと
世にの隨一とあたりたとと走行のとせ^シと
つへ下学^シと達^シとつへ文章^シと虛空^シへ
えに勘破^シと^シ一はくもあくわくわくの大言^シ
君子^シと虛説^シかうよとあくわくし似^シく天通

のよとくもあり人道のよとくすまくさん
虚空^シの虚空^シとちよいとあくすまくと
化^シの様變^シてやくすまくと能詠^シ

高舉^シと

○六義と今^シの和訓^シ事

詠^シにと美^シすすと清^シとくに種^シとかくり
歌^シあよへたと草^シひぐすりと連^シと詠^シし
きの詠^シとくの詠^シ賦^シ曲^シ詠^シとももがのをす
名^シうて凡^シ詠^シと解^シとあ^ス賦^シ曲^シと解^シと

あらうと詩の行義をあらうとせよとすむ
六事の法を和訓ともに今あることをもて集め
古語もがくもたれどもれんすりえあるま
きとつううとくもかの六事りすと白せやまされ
おの やうし賦比興のことをと訓じて一發一篇
であれ和字とありそけ運転とひげども一發一篇
の約あくとせや首せせ詠おあくとよく
推量せばはとてとて角一○今接もとてとて角一
左ふと凡新頃の二種とて西昇の人ひと詠論
圓暉と哀乐ととあらうとく玉侯士民の心

とけりやち賦比興の二緯とく眼界の異物と詠論
一て論語と文質とやうゆうことくも熟竹木の
名ともドもんにモナムとやうばへ歎じ故水
の風波ととあくはせ世事の優れどもあれども
ハ主をもりてあらひうて天下をはうひととすむ
ちるゝ一あれど能谱の六事義よりせ利と人和北
二用もくせき名目とゆりあるとてモノヌも用
とあらけと引向とゆくとてりえもんとよも
六事よたまよ當用と和訓のあやとまくへふせ
えとと能谱の新製すと仰ぐれへ和原の学不

中あつセテレバと称内ノ寃謹ト「もと角」

風

訓義ニ凡トハ詠諭ナリ爰ニ正言ト訓スニ和歌ニ
ハ副歌ト訓レタート比興ニ賦ニ紛ハレモ詩曰凡者
多出於里蒼歌謡之作田々を相與ハ詠歌各謡
其情周南召南親被文王之化ニ爾為風詩
之正經云然ハ其國其人ノ風俗ノ善惡ラ風謡ニ
依副テ羞ムル故ニ化トモ莊セナリ○今梓人坐
风化モ風俗モ總テ詩歌ノ詔諫ニシテ上所化スル
下所習フ俗トモ上以風化下下以風刺上トモムリ
何レモ時代ノ向謗ニ錄名代ニ菖蒲ノ謡ラ作りテ

雅

其代ノ俗樂ラ刺ル類ナリ○獨梓人ニ我家ノ訓
美ニハ凡諭ニ字ノ意ラ運ニテ諭言匠訓スニキヤ
然ラハ俳諧ノ字ト成セル詔諫ノ和ニモ叶フヘンカ
去尾ノ名ノ太騒十六字等ハ前世ノ明監ラ待ヘシ
訓美ニ雅ハ正ナリ直ナリ爰ニ正言ト訓スニ和歌
六百言歌ト訓レタート平話ノ徒言ニ紛レヌシ
俳諧ノ音訓ノ響ラ憚ルヘシ○今梓人ニ雅ニ賦ニ
ハ漢土ニ詩經ノ所成ニテ曰ハ虛ラ以テ天ニ起ア雅
ハ實ラ以テ地ニ止ル詩經ハ此ニ美ニ溢觴ニ乾坤
ニ至ト成セリ也故ニ我家ニハ凡雅ラ虛实ニ用

ト見テ凡ニ懲惡ノ虛ラ用イ雅ニ勸善ノニモラ用

レハ雅ニ正直ノ意シ汲テ公言^{ナホナ}訓スキヤセ等
ハ異名同躰ノ例ニテ一ソノ實議^{ヨリ}據^{キナリ}

頌

訓美ニ頌ハ称ナリ義ナリ爰ニ祝^ハ言ト訓^ハ和歌
ニモ祝^ハ哥ト訓^ハテ引歌モ紹^ハ前ナシ咎ニ詩^ハ序
ニ雅頌ニ躰ノ様^ハト雅ニハ國家ノ詠諫^ハ令口^ハ
頌^ハ君父ノ壽量ラ祝^ハ神ニ告^ハ意^ハ勿論^ニ
故ニ六美ノ引歌モ頌ニ躰ノニ明ニテ其外互名
ハ紡ハレ○今梅スルニ毛詩ニモ雅頌^ハ篇^ハ朝廷郊廟
樂歌之詞^ハ其詔^ハ和而并^ハ其美^ハ寔^ハ而密^ハ正^ハ

之於雅以大^ハ其規^ハ和^テ之於頌以西^ハ其止^ハ也^テ
詩之大旨也^{ト云}然ニハ雅頌ノニ用タル外ニハ莊密^ハ
次サラ備^ハテ詠諫ノ正直^ハ行^ハソ内ニハ和^ハ貧^ハ情^ハ
ラ含ミテ詩ニノ優^ハ義^ハ調^ハシ爰^ハシ孔子^ハ我家ノ太祖ト感^ハ自^ハ卑^ハ
和^ハ節モ世謂ナリ之經^ハ前^ハ溫厲^ハ知^{キナリ}

賦^ハ訓美ニ賦ハ鋪ナリ量ナリ美ニハ美^ハ言ト訓ス^ハ和歌
ニモ善歌トアリ又達^ハ李註ニモ衆^ハ事明白^ハセ
ト云ハ眼前ノ物ラ美^ハ益^ハテ直地^ハ姿情^ハ演ル^ハ
謂ナリ定^ハ哀卿ノ叙文ニモ賦ハ歌人ノ本意ナリトハ

四季ニ月雪ヨノ季麥相ラ詠レ花阜ノ優游ラ知レト
ナリ賦ハ殊ニ文章ノ物名ナリ

比訓美ニ魚ハ誘引魚ナリ多ミ誘言ト訓セシ和歌
六喻ウヘイ齐ト訓レスレト凡比ニ訓二紳ハレ共ニ魚字
ト凡字ノ和訓公六美中太騒ニテ我内ノ衆議ハ
智是ナレト百世ノ明監ラ恐ニキナリ。今按スルニ魚ア
ニ義ハ和侵トモニ令明ナラヌヤ去ニハ論語ノ陽貨篇
ニ子路ニ詩經ノ凡流ラ勸テ詩以可興ハト四季
ノ月雪花阜ニ誘ニテ優游ノ情ラ魚セトノ
謂ナリ共ニラ例ノ朱註ニハ發起志氣トノミ
云捨レハ孔子ノ宣給フ似而非ナレ物ニヤ興ハ
次レテ遊魚ノ魚ト註スニ詩者人心之感

興 訓美ニ魚ハ誘引魚ナリ多ミ誘言ト訓セシ和歌
六喻ウヘイ齐ト訓レスレト凡比ニ訓二紳ハレ共ニ魚字
ト凡字ノ和訓公六美中太騒ニテ我内ノ衆議ハ
智是ナレト百世ノ明監ラ恐ニキナリ。今按スルニ魚ア
ニ義ハ和侵トモニ令明ナラヌヤ去ニハ論語ノ陽貨篇
ニ子路ニ詩經ノ凡流ラ勸テ詩以可興ハト四季
ノ月雪花阜ニ誘ニテ優游ノ情ラ魚セトノ
謂ナリ共ニラ例ノ朱註ニハ發起志氣トノミ
云捨レハ孔子ノ宣給フ似而非ナレ物ニヤ興ハ
次レテ遊魚ノ魚ト註スニ詩者人心之感

物而形於言。之餘也トハ朱氏ア詩序ニ云
ナカラ何故ニ自詔相違セルヤ此等ハ教誡ヲ先ニレ
文章ヲ後ニセシ論詔一部ノ取違ニテ失後ハ例リ
察スキナリ卷レハ與ハノ美シテ詩歌ノ大本ト

知キナリ

○發句ニ妙字の所在ある事

むづりや字のすと十八までありて和音も連歌
忌をればあわと別の所をとどむとあがね
ひき鄰の心地とまくらやうじうて自己と官能

すあへつまほて中古の形音よりソトへの名詞
あわと連句で連句の用をあへれハ云々形音の
姿にて同形ぶ用のまくらあわとまーせんく
やまの用とまくら物と對して互のまくらせんく
えきと詩と云ひて物と云ふからなまくら終
あくテ四一章は前句と云ふやうにあわとまくらの
而と云ふ事と事と云ふ事の儀あるやうです。また
つひ事と聲韻の助字とある。よしもじのモサ
まとよしもじ何誰と云ふ事。哉未と云ふ事
ハ遂の怪々和歌の聲として物と對の名詞

ありあらへるやうのやよひてすと定まつて
及ぶる耶とうへし事とぞね哉未と坐
まれへまゐひてたどりゆくとまへるを由比
さくあめりすとまじて云屋の名あれりえと
制札のはとまくとくに梅よりれ秋もと心也と
ひゆやとつて捨松やと子名ありてせんにハ詞と
ひはとむちゆかすかとく

心物 いとらへずもとくよふ不す
やうだぬまくとくすも。辞の有
あればかのまくとくとくとくとくとくとく

又も何とてお事より詞とせ後章よりと
みて心詞とせられと味あまむねとれとれと
善ふとくとくちれと未練のつひからう今すやす
あふれとくせまくとおとくとくとくとくとくと
れとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
みの句絶のわくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

寛謡とまつて一況やせし所着の解にやく詞
みさわととのつゝ音句てやまの不とも句
るあんをゆうと通の自然自説あくままで言談
と豪じて自よのふと送ふもれどされ不そ
の物あれとあひうよとみうる性す感仰と
「信のまあん

中身 猫の夢やいしけ。秋の勝月
やまとくとも。さくら月のモ
けねけや。あよけやじは。何くち。何くとぞ
ら詠とがとおるや。がうねとけむと白い部

うると句歌のふとまつてせぢ。ば中とこ解よ
こくうち。中。やまと。ふくらき。和歌。しかれ
句讀あう。讀師の人せかひ。さん有識のくま
すはく。せりよ。

推挙人。ふと。旅。まみがく。山。山。山。山。

ばやと。ぐく新制。あく。まき。あれ。はく。あ
自由の推挙あり。ととをれ。よ。とれ。よ。と
う。物。對。う。と。ふく。推挙。と。う。は。ふ。と。
あ。と。う。今。推。う。た。布。せ。う。金。と。和。音。連。歌。の。ふ

ハ但あつて名前をつける新制がされ、近く一世の裏諺と本歌の区別して云ふのが笠とすり一
東笠とも再撰さるにけどもやうやうてゆ
あらそしもかきすりをやまがをも。第一心物
さすとをのさせすくらべてねむ廢
のやけふとせつせらへかひりくまとよ
みすりうち同とおはせくたる事用法と教
わられたくじゆくへあるのかと云ひてこそ今
ぞまくまきをせんとすむせりに
ふとぬぐくまくと下段のゆふすり「自己」

翁句とせよとあけり。あ序のつひかうと怪
あやの説く、顧我さうふ角のちかとあひ
やひまくにふくとの翁句と漢詩に

辛崎のねをもじり歌う。

けぬと五絶の一章にてを首句の絶扱う。
きとぬくと哉のひきとわされつゝとふと
正されどもあくふ角のひり下と下せり
のう絶つてとと下段のやくやくもしもれ
えのひり下と角とおみの意訓とあつて全く
滅ほの角扱あれ、あくと當すの裏諺と本歌

さへやひるどり冬とあらじと申す中
さよとまちをあつむるもあらわるる種の
病いやレサニ前へて月膳臘と未臘
う寒食詩の用古とていふと申す月と
やとくといひ鶴といふをあわせたる行
うりゆきと申すとていふと要碑う詩毛凡空と
空とくじかな半角とほしとせりに
捨ねやとすと自向自名の格と或ひ世と
張。とくとくとてあひ人。とくとくと
の向とてりや或ひ向の錯綜しあく

うなとふと道とてはよと仰ゆかの代か
とと當代のととやつてて牛と糲^{ヒツ}と
物と仰げててかとてと接あつてあくと
かてかとてかとてかのふ名とあくと
かとてかとてかとてかのふ名とあくと

○ やとくの言ふある事

古事記二章かとてかのふとある事とあく
とと何とととが耶と種いまことかくの
ものかとてかとてかとてかとてかとてかと
てかとてかとてかとてかとてかとてかとて

ハ之に新大のまゝと云ひ一をもと
ニモカ思ひたまつ。ともかくとんをあうけ
ニモカ子孫をひそむきおはなわ。此ひに
えりと自家の代文あつてよ二つの用あれ
えすよしの用ありてばれと各自の不従ふも
内へちゆのや向て押す捺す捺字のひじもそれ
ゆすやせらしかるうへ

東北立中御免地おとほがうとけにの能なよ
シテよしよよとおとおとせりと押す捺す
あとづきとつ論あれを也。再捺

けニヤヒミキサヒサヒと敵對へて立てし
ニモアハシムケンヤヒトヒヤの儀と云ひけは
あひきせきをひくらの御事とをあらざれ
開拓裏とがすとあつてしとを御のひ
おありをのせよ。萬葉や本作に於て御室
哉。とぞくわくとテモサハの御事とがふじ
もむかもとあれけや。とおと種々哉と
敵對の御ふくらむとじとあく難れど
テモサハの解説と云ひ一立てじゆのととほ
御室とて御起の御から木使ひある御事。

之言事跡とされや矣。もじに湯山物の名ふ
とするかくやけ格。はなはだ新制あれど實序
ノ則すより一もやや重き給の題となり。然る
は御名とある。之がちうり。そのたれとを
書かれそと書かれ。とせとどと敵對と
され。再撰のゆ句と云ひ。すと
或と連袂。ノレ語。すと詮。ゆとある。あらう
兩家のゆ句。あらう。あれとて論。ゆと。す能也
す能也。○今後また連袂。すと。肩井の往
句とあれば。筆を盡凡てのゆつとを諭が
く

ゆ句の代句とあげて。すと。肩井の往
いきく。肩井。ゆ句の往句。あらう。ややまよせ
入ふ。まよせ。ゆく。まよの。すと。居ゆとも。じう。居
ゆ例の。こふちうとも。じう。

三段切 同上。まよ。ふれとも。ゆく。
あ。の。まよ。あく。こみ。ゆく。ゆく。

前章と武の。まよ。ゆく。腰金の。ゆく。あらう。
はの。ゆく。ゆく。ゆく。ゆく。ゆく。ゆく。ゆく。ゆく。
ゆく。ゆく。ゆく。ゆく。ゆく。ゆく。ゆく。ゆく。ゆく。
ゆく。ゆく。ゆく。ゆく。ゆく。ゆく。ゆく。ゆく。ゆく。

ありとどりを優游する極である。第もア
はうとせむと云ふわけにもんとおもひか
まうはあうふまると挂ねて食あと
然翁生後之傳ありと云ふとあるが是
と云ふ十歳の俳諧辨ありとれど前年の西
と云ふ事とすと中と云ふ字あられおれ
と云ふ事ふと云ふ所と例のとよちりあまえ
云ふゆきよかの例と云ふ所と例のとよちりあまえ
のちあはるあれは自身の詩句とあらよ
名前されと一せの寛後と高麗之

東菴云△再撰あるにはゆのび居と希向と
はうちかずあつてふたりやうて二語を
考據こうて底しと底すあり一云れともかく二底
の名目あれひまつてやあとと云月あと連続
のちゆふとからうすて二底の诗と信とし
例の连篇不作と云ふの意と信とし
ひそと云ふと云ふ名あれ二底の名と
あはりやひそに我のゆのゆと云うて裏に
角撰の腕力と云ふと云ふと一種の寛後が
のとく一せのひがとあはりとあれ

ニ雁也。えよ。あわせ。たうとれのむ
室解し。室やの瘦し。室中
されば。二角の室。すこま月の室。も
れのもの。もあきて。えよ。しらす。あ
ひも。そとね。二雁の差。おちりに。たゞ
洞の双角。うとうと。白尾。と。移よ
空也。と。青解を。枯木寒。岩の森。あ。室解
る。もと。中の事。解。と。と。室也。と。ま。む。解
と。し。と。と。室。の。う。と。あ。う。と。瘦。の。す
と。と。と。と。室。の。格。と。移。と。と。と。と。と。と。

雙角。室解。室。瘦。室。中。
と。あ。う。と。瘦。と。室。解。と。と。と。と。
と。と。と。と。室。の。格。と。移。と。と。と。と。と。と。

蓮二云。三段。ども。に。か。の。と。む。う。と。と。と。
と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
人。と。通。と。又。お舟。母。と。葉。と。手。と。も。と。よ
く。と。は。つ。と。う。と。あ。と。と。と。と。と。と。と。と。
と。や。と。の。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。

えどよしの用事候て守候。すよせ
抱あつておありに京零。て次のせりに
至見と一あれハお舟と奇葉と以毎。リミ
ハ駕籠のをあり。と端より駕籠のを有
あれ。れど。と。おせん。切。や。ひ。し。ね。ま。之。底
の。典。節。と。す。と。賀。セ。を。津。と。要。馬。の。代。舉。と
樹。さ。そ。ら。ね。と。は。前。よ。る。宵。と。寺。詠。の
和。歌。と。翻。歌。と。林。と。い。様。と。枯。れ。ね。根
と。木。と。れ。あ。と。月。の。清。涼。と。深。と。夜。と。靈。と
の。音。き。を。称。と。ん。聲。と。換。骨。の。に。く。と。下

手や。二段の用事。と。か。手。と。お。手。筋。切。と。三
手。も。れ。わ。み。ろ。と。て。ち。の。う。と。底。切。が。も
又。五。手。と。あ。と。と。れ。と。今。と。め。り。と。手。り
に。と。物。と。と。と。用。と。あ。と。と。せ。れ。と。底。の。事。
と。と。と。と。れ。と。新。た。の。差。ふ。と。あ。れ。と。や

○心ゆき多々ある事

手。ゆ。よ。す。の。心。ま。せ。わ。よ。く。ゆ。と。手。と。中。ゆ
と。捨。持。ゆ。け。と。手。と。中。ゆ。と。手。と。中。ゆ
あ。り。と。手。と。手。と。手。と。手。と。手。と。手。と。手。と。手。

とぞくせんねりまかでとくふかくねと万代一紀
の傳仰の書は、今宵を初めのそとらとまには
あくへておのとまうと云ふ式の字が一々うつ
すれどもとあくまくややきとくに

とよまくくじあるを知。と。慶年

とよまくあくなど。と。宵七月の客

えやけやけの仲間とういてまくとゆきの名前
あそべふとととととととととととととととと
子とととととととととととととととととととと
ととととととととととととととととととととと
ととととととととととととととととととととと

とよまく金のゆとりとそれと取扱うとせの用
と用うて二二とよえにけふとあくとよ
東老ふけうきと湖南の送福とあくと前と
もとほの唐辛と色と秋のく生と井と称
後ともとよえ各月と食肉と奥とわ
詠詠の辛とゆりとあくと后にやまうの
は後と減ねと再機のたまうとたまうの館主
のゆうてはまうとまうとあれいゆいゆいゆ
とよまうとよえとよえとよえとよえとよ
とよえとよえとよえとよえとよえとよえと

ひれられて千才の筆とほんとうすむれどまは
くぬとよとぬけあつて、くはくせふとくゆ
はくはくとやぐたと再撰のゆうてわくを
一書の新古とゆくが成るよと二書の名ともよ
耶、字の下の名の名とおとまよ月の設と
山あみむね多々とくとおとおととくと
八千萬億とくとくとくとくとくとくとくと
百千萬億とくとくとくとくとくとくとくと
各あよゆくとくとくとくとくとくとくとくと
すありけの夜詠あれへあきかへと前のあきかへ

ハナの増減あんじゆうとくとくとくとくの捨詞
と一言の書の所をあちらはくとくの書とく
るまくとくとくと遣稿の大経とくとく用柱
例の實事とくとくとくとくとくとくとくとく

ふはー相の手よ。乾傳ちり縫の内
ふはー袖の手よ。しととまよ有りと間

されは乾の手よ。田兵の内よ。あひあひ
えとととととととととととととととととと
あひあひあひあひあひあひあひあひあひ
さすされは乾の手よ。有りと間

相も無くあらゆ事ひと特うる有られ
朝も申あらば向とからて拂の内と陽へそよ
あもと没やまびくらどもゆひへち軟の處
ちるどやがやす。又すは佛とほども近く
田舎のまゝ葉とふかうてモ相もあらぬも
とわざとまことかくもきやうと感へ
の跡もあらずとおうむかとありよ」勅ぐ
あらむとせ論あれば向と拂のまや方さん
とほりすと所用の跡あらまやと教と教
うて相を向作の用とひじきもあると拂の様

アツハ官家と拂はの姿あんと相を田家の
富もちらかやまへや、さむま家へけ初
叶至るや與とまへ一次に袖のじせ一まへと
嵯峨の居柿今よ懷にあらまやあくま
去来と武門の功とまげておる宰人の名と
称とさうよは用とこらへり——「しき幸」
がまよ停と袖をよと寶富の二様あつて
乍れ不常の体とあり——「まんとぞ」と
されへ軒ひよ局とよもやと大名の令狀
あれハじう北条殿ともまよふんと倒の御書

とたゞどりや。再撰もうへじかと和歌も
我あらあくよのとまくまくらひせす。ま
うまくふとせまうと通例あれ。今此二章
はらのありよゆうてふわらはれとけうす
抱きまく村四のとせとうとせと。まは
の事かがふをまきけやめどあひそ
わきよまことじくつる事かとまかく。ま
いのまつと例は通達めまうあれ。ま
こ今せ。さきうとねくとせうとらく
東と左の名目は大過とい云射ゆどる。

えあくすに下るあくまづれの神向しんかに。次
云射の名れる玉富ちり我家がの事もんじ
れよ實談の用捨あん。う。う。悔もんちがひよ
ゆ子とらとく極ひうげには格とら。あり名前
へあくもなうもとあれ。ハ和歌。しす。歌は年ふ
の名あく。ま云射とく極ひうげを。通雪せ。京
れあれ。而て射とく極ひうげ。一曲。未曲。序。不
て極もと。ふ名のゆすあり。それの和歌。う。ま云
あきら。う。れの能活。う。而て。がさん。主姓と一格
名。あきら。ま。今。實物のとせ。とよ。まえ。と
ひ

まくの事もあらへたる所があつては和歌が
さうし有一篇と解て見様がりじ下のふ名があ
るをわからずあると仰せられゆゑもく
大過も云せしらゆめ様ひあんて事も有りけ
りぬちよどみもあはれとあくとおおき
おまうへうそい事もすく所着せりゆゑまの
おあはれし事もはへる事もあへておおき
お名前とうらしてあらへとむかへしよへま
まくへうそい事も古のゆくいあくと和歌の
名前とゆくへうそい事も古のゆくいあくと和歌の

ゆかのつひがりゆくうつあ殊の人也實にやあむ
片付く事無くちやうかうて古きの或りとあ
ゆれきれり化けよ對へて福とくさむゆふ
瓦片の瓦敷もろよきさり玉と言ふ不到の
名あらはれゆくはゆくはゆくはゆくはゆくは
東方云々壁とおは壁裏とて例のあまうに
路あらはれゆくはゆくはゆくはゆくはゆくは
ゆくとまく一とくかへ過ぎちぢりと對
て多きとゆくはゆくはゆくはゆくはゆくは
隠されりや但其例の多きなどといへる

古の名前とあらず。又やへて滅ねば、集
の處にてともかくもあつたまつて、あら
御令のまことにあまねく武庫の邊稿。きくは
て今れどもとあけよしとよきと不端四と海よ
り西施う客をもあたらうる。再撰
の名北庫拂す。でねみの名前に罪ふかを
さへぬして寃詰と義よきとせや。

大廻 王侯のねえをとり所す。
りまとあくまくとおくる。

王侯の例の湖南北邊稿。かくて奉

の事と御内の秋役とほて白馬の丸の降
も坐る節にのこ版とあくまく御うそ不^レはる句
の版。とくとく詔と版。とくとく詔と
とくとく詔あるねえを下版のやへて御
而上がよしとあると下版のやへて御
とくとく詔あるねえを下版のやへて御
ゆらかあり次よりまたの事とせよ常の
偶作とくじの例のふとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
わくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

やうへせぐ句がやえと集をもうくもあらうにけり
往きとくふくとりとすよみかと鎧詞のにゆう
連音と難詷ともいひつうとからて他儀の
曲歌とくわーはくあくけ様とく事能のば
ことのゆうひで善用のべくわくとまくへ
業おこしとくまくやうとく馬の文章訓を
常能のたとほむとく良選は所の歌といほ
ひりとれとくらむとくはれとくとあ
秋のうゑとくはる起作と結撰とく常山
の能能傳ありて序のう尾と詷とくまく尾

ひよふとくとくとくとくと文章のとあくとあく
もきとあくとくとくとくとくとくとくとくとくと
他儀と十七の終りとあくとくとくとくとくとく
和音せき後はよわくとくとくとくとくとくとく
のよもとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
わくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
の言唐不到のうとくとくとくとくとくとくと
ハ接衆の歌とがくとくとくとくとくとくとくと
玄妙 まちしやくまきそとくとくとくとくとくとく

か月よおけニテキと謡むるにんやひんこ筋あ
フジ原ソヘ中所ソシ下所をすせ大内アセ
あわくもナラキムラの間ニサヘテモアス
モ或ヒ月ニアモトホアモトホアモタヌ日也春
ニモヤリモヤリ秋月の花日ソレモアシキ
暮秋の朗詠ソシテヨリ詩合の事均
アモウカニシテ嘆美の余地とゆくニテ春
忙ミ翁自アリモトホアヤエモトホア密
やモシツヨク新作ノリテモアモアモアモ
人の歌ヲカドヨヒシテキモトハ致ヘチと

マニテ押切の山はヒツヨリモヘア再接するにけ
ニ名を信ヘて在せぬ月とれども解ま體
の詞と叶フ知る事の或因からずレバ温故
知新カラフマニテ知る事のとあるとあるとし
一ツの事と見立たゞばホの事ととひはホ
の事と見立たゞばホの事ととひはホ

